

校長室だより



令和5年11月2日

No.19

気が付くと11月ですか…。10月は全国の神々が出雲に集まるので神無月。その神様が地元に戻るので11月は神帰月（かみかえりつき）と言う言い方もあるそうです。神様も行ったり来たり大変ですね。（校長も出張が続いても文句言わないようにします。）

さて、ほんごうで11月と言えばほんごう祭です。1年に1回の大きな学校祭の季節がやってきました。体育館の舞台上、ホールで、教室で、舞台発表の練習が繰り広げられています。ある学年はスポーツの要素を取り入れ、ある学年は太鼓や楽器でにぎやかに、ある学年はダンスで盛り上げ…各学年の特色もしっかり盛り込んでいるようです。子どもたちが帰った後も先生たちは練習の準備やシナリオの見直し、道具作りなどに大忙し。みんなで力を合わせて今年もすてきな発表になる予感がします。

練習を見ていると、まだまだ先生が手取り足取りで、子どもたちも一生懸命動きや位置を覚えている段階が多いようです。この段階って子どもたちもよくわからない状態で大変ですが先生たちもなかなか大変。思ったように子どもたちが動いてくれなかったり、並び位置が違ったり、様々自由なことをやり始めたり…。でも、こういう中から意外と子どもたちの良さが突然出てきたりすることもあるって、それを取り入れたりしていくのもおもしろいんですけどね。

私も以前は舞台発表の係とかになって、子どもたちと学校祭目指して連日、練習に明け暮れた時期がありました。その時、やっぱり子どもたちが決められた動きやセリフができず、ずいぶん悩んだこともありました。そんな時、先輩の先生から「場面の設定と子どもの配役を決めたら、あとは子どもが勝手に話を進めてくれるから大丈夫。この子ならここでどう動くか、こういう場面でどう言うか、それをまとめていくのがあんたの仕事だよ」と言われました。なるほど、こうあるべきではなくて、この子だったら、この場面で言うだろうセリフを言ってもらえばいいし、この子だったらこの場面では、う～ん、きっと走り出すな…とかをまとめて、それで流れに沿ってお話に仕立てたら…あら、なんだかおもしろい舞台ができちゃった…子どもたちのかってすごいな～と思いました。そもそも、子どもたちって大人の思うようには動いてくれないものですしね。でも、以前、担当していた生徒さんが本番のダンスの途中で舞台から飛び降りて客席に飛び込んだ時には大慌てで私も舞台から飛び降りましたが…。毎年、こんな風に子どもたちといっしょに面白い発表ができたのを今となっては懐かしく思い出している校長です。ちなみに、新横浜ラポールにあるラポールシアターという劇場のこけら落とし公演は私が脚本、監督を務めた「悪魔株式会社の憂鬱」という作品なんです（プチ自慢）。

さて、ほんごうの子どもたちも先生たちといっしょに、舞台発表の作品を作っている最中です。もちろん、子どもたちの予期せぬ動きも（動かないことも含めて）ありますが、きっとみんなで舞台の上で最高の笑顔を見せてくれることと、今から楽しみです。

今年のポスターです

